國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

『学生宗教意識調査総合分析（1995 年度～ 2015 年度）』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000520

『学生宗教意識調査総合分析（1995年度～2015年度）』

國學院大學日本文化研究所編『学生宗教意識調査総合分析（1995年度～2015年度）』が2018年２月に刊行された。本書は昨年２月に刊行された『学生宗教意識調査総合報告書（1995年度～2015年度）』の姉妹編である。1995年から2015年までに12回実施された学生宗教意識調査報告の各回の結果をまとめたのが前著で、今回は20年間の調査結果を総合的に分析したものである。この長きにわたる調査のきっかけになったのは、1992年に日本文化研究所の宗教教育プロジェクトが実施した約4,000人の学生を対象としたアンケート調査であった。1995年に「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトの合同でなされることになり、以後合同調査という形で2015年まで継続されたのである。息の長い調査は多くの研究者の協力の賜物である。

本書の分析の視点は大きく４つに分かれる。20年間の経年比較、宗教への関心の度合いや性別などとのクロス集計、自由記述に示された意見の分析、そして４回実施された日韓での同時調査の比較である。冒頭に全体を総括する解説文（「学生の宗教意識は20年間でどう変わったか―グローバル化と情報化が進行する時代に観察されたこと」）がある。

この調査の質問項目には毎回ほぼ同じ内容のものと、回ごとに少しずつ変えたものとがある。同じ質問内容としたのは、次のようなものである。回答者の性別、学年、所属する学校名、住居の形態、卒業した高校が宗教系かそうでないか、宗教への関心度合、家の宗教があるかないか、両親が信仰をもっているかどうか、神棚・仏壇などが実家にあるかどうか、初詣、墓参りをしたかどうか。

対象が学生に限定されているとはいえ、こうした事柄について20年間の定点調査は他に類をみない。また、宗教に関わる意見、宗教教育への関心や知識、葬儀形態への意識、サブカルチャーへの関心、ジェンダー問題への関心、オウム真理教問題やイスラム教に関する知識や意識などについての質問は、少し内容を変えながら複数回質問した。それぞれ具体的な回答の選択肢が設けられているので、年度ごとの違いの比較も興味深い結果となっている。日韓で同時調査を行ったのは1999年、2000年、2005年、2007年である。ほぼ同じ質問項目である。世紀の変わり目をはさんでの日韓の学生の宗教意識の変化の比較も非常に興味深い。性別による違いなどは日韓とも同じ傾向を示したが、宗教を肯定的にとらえるかどうかなど、いくつかの質問項目では、かなりの違いがみられる。

解説文の末尾にとくに注目すべき分析結果が12点紹介されている。たとえば、信仰をもつ学生や宗教に関心をもつ学生は21世紀にはいってむしろ増加気味であるとか、神棚、仏壇をもつ家は減少しているが、初詣、墓参りのような年中行事的な宗教習俗に関わる割合は20年間に大きな変化はない、あるいは両親が信仰をもっているかどうかは、学生の信仰の有無や宗教に対する考え方を大きく左右するなどである。本書は2018年度に英訳することが計画されている。オンラインでも公開予定なので、国外の研究者にとっても貴重なデータとして広く参考にされると確信している。

（井上順孝）